

「性」見つめた対照的な表現「ピエール・セルネ&春画」展

人間の性愛は今も昔も、東も西も、基本的に変わりはない。東京・銀座のシャネル・ネクサス・ホールで開催中の「ピエール・セルネ&春画」展では、性を題材にした2つの対照的な表現を味わえる。

会場には日本の春画の傑作と、フランスのアーティスト、ピエール・セルネの写真作品「Synonyms(同義語)」シリーズが並ぶ。

まずは春画。東京・日本橋の古美術商、浦上蒼穹堂代表の浦上満氏の個人コレクションから、鈴木春信、鳥居清長、喜多川歌麿、鳥文斎栄之、葛飾北斎の5人の浮世絵師による珠玉の作品を紹介している。特に清長の「袖の巻」や歌麿の「歌まくら」は数ある春画の中でも最高傑作とされ、大胆な構図や美しい摺りなど見応えがある。栄之



鳥文斎栄之の鮮やかな肉筆春画(左)とピエール・セルネの写真作品。対照的な作品が同じ空間で融合する

の肉筆春画絵巻「源氏物語春画卷」も、江戸時代のものとは思えないほど色鮮やか。

性愛を時にユーモアを交えて描いた春画は「笑い絵」とも呼ばれ、江戸時代にはあらゆる階層の男女に親しまれた。絵師らの豊かな発想や巧みな表現は、後に海を越えて印象派やピカソにも影響を与えたが、明治以降、国内ではタブー視されてきた。近年、ロンドンの大英博物館で本格的な春画展が開催されたのを機に、平成27年に国内でも初めて本格的な春画展が永青文庫(東京都文京区)で開かれ、約21万人を集める盛況ぶりだったのは記憶に新しい。「いい春画は美しい。まだ偏見はあるが、ぜひ本物を見てほしい」と浦上氏は話す。

一方、セルネの写真シリーズは一見、モノクロの抽象画のよう。ただよく見ると、人体のシルエットだとわかる。「スクリーンの背後にいるカ

ップルの姿、つまり影を写したものだ」とセルネ。男女に限らず、男と男、女と女の場合もあり、性別も人種も国籍もわからない。「環境と文化の違いはあっても、人間は奥底で似ている。だから文化や思想の違いも互いに心を開いて受容すべきだ」というメッセージを込めた」という。

男女の和合を直接的に描き、生きることを寿ぐ春画と、想像力を喚起し詩的に情愛を表現したセルネの作品。対照的でありながら、同じ空間で融合している。「のぞき窓」を思わせる壁の丸窓など、会場デザインにも遊び心が光る。(黒沢綾子)

◇

4月7日まで。展示替えのため3月28日休。入場無料。問い合わせは同ホール事務局(03・3779・4001)